杏林医会誌　57巻2号　103～104　2026年6月

報　告

杏林医学会 第48回例会 開催報告

Viral Infections in HSCT patients

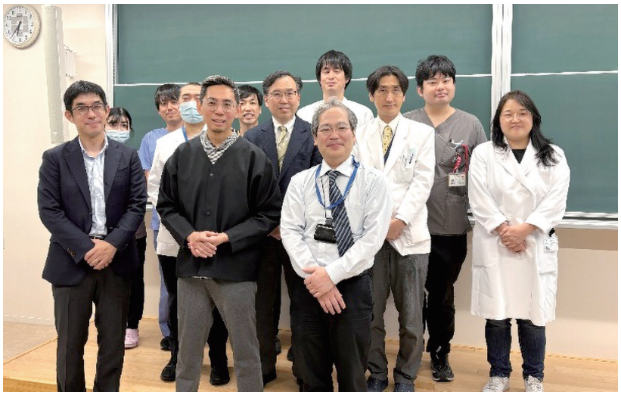
（演者　Carlos A. Q. Santos, MD（Professor, Department of Internal Medicine, Division of Infectious Diseases Director, Transplant Infectious Diseases Service RUSH University Medical Center））

嶋　崎　鉄　兵

杏林大学医学部臨床感染症学教室

第48回杏林医学会例会は，2026年５月８日（金）の夕方に開催され,「Viral Infections in HSCT patients」をテーマとして，米国イリノイ州シカゴのRush大学からCarlos A. Q. Santos先生をお迎えしました。Santos先生はワシントン大学で感染症のトレーニングを受け，Washington Manualの感染症分野の著者としても知られています。移植感染症を専門とし，腎移植，肝移植，膵･十二指腸移植，骨髄移植のレシピエント診療に長年携わってこられた臨床家です。

Santos先生には，私がRush大学に留学していた2015年から2018年の間，臨床・研究の両面でご指導をいただきました。システマティックな問診や診察，網羅的な鑑別診断の検討といった臨床的な側面に加え，プログラミングや疫学にも精通されており，電子カルテのデータベースに直接アクセスしながらビッグデータを用いて臨床的疑問を解決していく，疫学研究者としての一面も持つ優れた指導医でした。温和な人柄も大きな魅力であり，その臨床能力とコミュニケーション能力の高さから，数々の修羅場を経験してきた移植外科医たちからも強い信頼を得ていました。



お互いに，あれから10年が経ったことを昨日のことのように思い出しながら，今回はプライベートでの来日を機に貴重なお時間をいただき，杏林大学まで足を運んでいただきました。

杏林大学では血液内科を中心に骨髄移植診療を積極的に行っており，今回の講演では，免疫不全患者におけるウイルス感染症の中でも,特にヘルペスウイルスに焦点を当て,症例を軸にしたレビューが展開されました。

最初の症例はサイトメガロウイルス（CMV）で，一般的な臨床像から治療薬・予防薬の選択，耐性ウイルスの問題まで，最新のエビデンスを踏まえた丁寧な解説が続きました。CMVは血液内科医が日常診療でしばしば悩まされるウイルスであり,治療薬の選択やコスト,治療期間など,実臨床に直結する話題について自然と議論が盛り上がりました。

続く単純ヘルペスウイルス（HSV）の症例では，予防

左より嶋崎鉄兵学内講師，Dr. Carlos A. Q. Santos，倉井大輔教授

第48回例会報告（主催：医学部臨床感染症学教室，2026年5月8日開催）

や治療の基本に加え，耐性ウイルスや新規抗ウイルス薬といった近年の進歩にも触れられました。免疫不全患者では免疫正常者とは異なる臨床像を示し，診断に苦慮することが多いという点に参加者からも共感が寄せられ，地域を超えて同じ悩みを共有する場となりました。

三つ目の症例は水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）の播種で，治療薬や投与量といった基本的な内容に加え，免疫不全患者に対する不活化ワクチンの有効性など，最新の知見が紹介されました。

全体を通して，Santos先生が臨床と疫学の両面に精通していることが随所に感じられ，症例というミクロの視点と，エビデンスというマクロの視点が自然に行き来する構成となっていました。複雑なテーマでありながら，基礎から最新知見へと段階的に話が進むため，若手医師にもベテラン医師にも理解しやすい内容であったと思います。質疑応答は終始活発で，予定時間を30分ほど超えるほどの盛況ぶりでした。前日に来日されたばかりで時差のある中，貴重な講演を行ってくださったSantos先生に深く感謝申し上げるとともに，このような機会を実現してくださった杏林医学会の皆様にも心より御礼申し上げます。